

2019年5月15日
5班(相田、柴田、舘林、古森)

地域通貨を知ろう

著者：西部忠、出版：岩波ブックレット

～地域通貨の可能性～

(相田)p.63~67

【ビジネスとボランティアの境界がなくなる】

- ・ビジネスとボランティアは正反対の活動
- ・ビジネスはお金を儲けることを目的とする営利で利己的な行為、
- ・ボランティアはお金などの一切の対価を求めない無償な利他的な活動、

- ・現代の働く＝お金を目的とした有償行為
- ・本来の意味の労働や勤労＝非営利的な有償行為
- ・ビジネスの利己的な行為や、ボランティアの利他的行為は多少は必要である。

しかし、それらが行き過ぎてしまうのもよくない

・ビジネスとボランティアとの境界をなくすためには、本来の労働や勤労の意味である非営利的な有償行為にする。

・地域通貨を使うことで、ボランティアの無償行為を有償行為に、ビジネスの営利活動を非営利活動にできる。

↓

- ・地域通貨市場が、主体的に価値を評価されるから。
- ・無償のボランティアは有償行為として高く評価され、営利活動であるビジネスでは少し低く評価される

【新しいコミュニティが生まれる】

・地域通貨はコミュニティ通貨といわれ、その意味は、人々が一定の空間にいて、相手の顔が見えるということを前提とするもの。

・リアルコミュニティ 地理的な近さ

・バーチャル空間上、つまりインターネット上の相手の顔が見えないところでのコミュニティ

・バーチャルコミュニティ 地理的な遠さ

・現代社会ではこのリアルコミュニティよりバーチャルコミュニティの仲間に親密感や連帯感を感じることがある。

・ネット空間の中には匿名的世界(顔 名前 性別 年齢が分からない)があり、そこでは地域通貨の基盤となる相互信頼関係が作りにくい。

・理念や価値観のような強い意見、関心、興味によってできたバーチャルコミュニティでは、相互信頼と規範感覚が自発的に作られる可能性が高い。

・今後も地域通貨をリアルコミュニティとバーチャルコミュニティ両方の面から考えなくてはならない。

・地域通貨はモノやサービスの交換手段だけではなく、一定の理念や価値観を、表現、伝達共有するものでもある。

・個人がどこにいても利用できるようなシステム、バーチャルコミュニティ通貨であることが望ましい。

【コメント】

ネット上で地域通貨ができれば、その使われ方がさらに広がると思った。地域通貨は食べ物というような生活に必要なことに地域通貨が使われているが、ネット上で地域通貨ができると、ゲームなどと言った趣味にも地域通貨が使われるようになるのではないか。

(柴田)p.67~75

【コラム グローカル通貨 Q】

・グローバルとは→ローカルであり尚且つ、グローバル

・Qはネットで利用できる地域通貨である。

・Qプロジェクトは、2011年11月に発足したもので、今でも日本、海外に居住しているプロジェクトメンバーがバーチャルNPOとしてネット上で活動している。

・西部先生と穂積さんという方がWindsというソフトウェアを使い、サーバーで管理を行っており、これにより記帳の煩わしさを無くして多人数のLETS運営を可能にした。

→英語にも対応できるようになれば、もっとグローバルになる。

【Qの目的】

・ボランティアとビジネスの対立を超える協同的市場経済によるアソシエーションを構築するための交換媒体としてQが作られた。

→Qが広い産業分野をカバーできるよう現行とは違う組織制度を設計した。

・Qにおける新たなデザイン

・新たな組織制度の設計→独特な市場経済システムのため(ex.団体支援制度)

【環境保護運動に活用するには？】

・地域通貨は環境保護に使える？

→地域内の取引を活性化させて地産地消につながり環境保護につながる。

→環境問題解決に取り組む人々が、仮に4Rを前提・目標とした「Re」という地域通貨を作った時、そうした価値観、理念に合致した取引が行われ、それに賛同した企業などはサービス提供の一部を「Re」で取引できるようにした上で、その一部を環境保護の助成金として出資するようになる。→さらに人が増えれば、グローバルになり国境を越えて「Re」は広がっていき環境問題解決につながるきっかけとなる。

【コミュニティウエイの例】

・カナダのトフィーノという街では「コーストドル」という地域通貨が使われている。その街では「フレンズ」というNPO法人が森林を伐採から守るために活動しており、観光客や地域の個人、企業は「コーストドル」を落とすことにより「フレンズ」の活動を支援している。

【今後どう発展していく？】

・今ある地域通貨は、もっとバーチャルな形に進化していき増加していく。

・インターネットで簡単に開設できるようになればコストダウンを見込め種類も増加する。

・色々な仕組みのLETSができることにより色々なコミュニティが出来る上、色々なLETSに参加することができる。

→マルチLETSは地域通貨の特性を高める上、個人の個性を表現するものとなる。

・電子マネーやICカードで地域通貨が使用できるようになると地域通貨同士のリンクが容易になりバーチャル空間上で相互リンクする地域通貨のネットワークが出現する。

・自らの個性と価値観において様々な地域通貨を使い分けると様々な地域通貨がもっと流通。

→影響を受けるようになる。

・日本における地域通貨は現在成長期に入っている。次なる成長をするには多様な考えと目標をもつ地域通貨を互いに結びつけて広域ネットワークを形成するべきだ。

→連絡協議会のような場から各々のビジョンを提示して協議しあって可能なところから共同していきネットワークを形成していくことが地域通貨の可能性を広げることに繋がる。

【コメント】

地域通貨の発展には話し合いや協議が必要であり、ゼミ内通貨をこれから自分たちで行うにあたって話し合いによって皆の考えを出し合ってもっとよりよいものにしていきたいと思った。

(館林)p.75~79

【いくつもの地域通貨に参加するということ】

- ・グローバルマネーが各国通貨を駆逐してしまうのを問題視
Ex)統合通貨としてユーロを使う、自国通貨でないのにアメリカドルを使う
→多種多様性を持つ柔軟性や環境適応性をもっと重視すべき
- ・地域通貨も複数化・多層化する
→一つの地理的な地域に価値観や関心の違いに応じていろいろな地域通貨があつてよい
- ・小さい地域通貨もそれぞれのコミュニティ内で固有の価値を持っている
Ex)相互的なサービスなど
→効率的で便利であるという理由から、流通範囲の大きいものが小さいものを駆逐するとは限らない
- ・自国通貨と違い、一人が一つの地域通貨にしか参加できないわけではない(複数可)
→選択により、自分の個性を複数の地域通貨によって表現できるし、各々のコミュニティで自分の違った側面を表現できる
- ・ICカードを用いることで、購買情報に匿名性がなくなる
→匿名性はかえって自分を狭く閉ざすことになる
- ・一つのコミュニティで人生を送ることで、そこからはじき出されることに恐怖を感じる
→自分の関心や価値観に合致するコミュニティに多元的に帰属し、そこで自分を部分的に開くことで軽減される
→固定された、閉じた共同とは違い、絶えず変化するオープンなものに

【地域通貨は出発点】

- ・地域通貨は、人々の関係を築き、意識を根本的に規定する「メディア」
→それで何ができるか、その上でどのようなことが起こりうるか、目に見える効果が現れてくるのには時間がかかる
- ・地域通貨が生活に浸透することで、人々の行動や意識も変わる
- ・地域通貨は、経済的な自立や活性化を実現するだけでなく、コミュニティにさまざまな形でつながる個々人や諸団体が協同的な経済システムを形成することを目指している。
- ・現金と地域通貨をミックスで料金を支払うことで、地域通貨をどのように使っていくかを私たちに考えさせ、国家通貨のあり方をも考え直させる。
→一人一人が自分たちの未来をどういう方向へ進めるべきなのか自問し始めるだろう

【コメント】

自分の興味関心のあるコミュニティで用いられ、相互扶助に用いられるのが地域通貨であるとするならば、スマホゲームなどで用いられるコインは、地域通貨と呼べるのではないだろうかと感じた。スマホゲームは地域通貨の実現した社会の縮図とは言えないだろうか。